価値論からみたスミス「経済人」とその限界

村　尾　勇　之

第1節　問　題　意　識

前号紀要において、私はスミス経済思想の立論の基礎とせられたものが「経済人」であり、それを基礎として形成せられたものが、スミスのいう「自然的社会」、「商業社会」であることをのべた。そしてまた、その社会の根抵にあるものが理神論的世界観であり、それ故に「見えざる手」を媒介として成立するのが、スミス経済思想の方法論であることを説明した。そしてスミス経済思想の基礎である「経済人」が、いかなる範疇において論じられたものであるかをのべた後、そこに内包された諸要素が、結果的に一括して「経済人」として包括されていること――そのことに問題はないか、それを疑問とした。何故なら、歴史を創造するもの、歴史を動かし発展させるものは、その時代において主体をなす階級であり、それを理論的に確定することは、このスミス思想を明らかにするためにも基本的な命題であったからである。しかしながら、その答えは、必ずしも明確ではなかった。そこで私がのべた限りにおいて、「経済人」は、「中等ならびに下層階級」、また「産業資本家、賃銀労働者、土地所有者」であり、さらに重商主義批判の結果、新しい社会層の担い手として歴史の必然的過程の中で、歴史的に要請された階級というだけのものであった。もちろん、それによって上記の疑問を明らかにすることはできない、そのためには、スミス思想全体系の基礎をなす経済人、すなわちスミスの理神論的・自然法的経済思想の基底をなす階級的な「経済人」が、スミスの経済理論において、どう現われているのか、そしてどのような矛盾がそこにみられるかを究明してみなくてはならない。私は、こうした観点にたって、「経済人」をその経済理論において、とくに価値論上から考察しようと考える。だれが、どのようにして商品を、価値をつくりだすのか、新しい社会、すなわちスミスのいう「自然的社会」において、それはいかなるものとして把握されているのであろうか。

この問題は、主として「国富論」の第1編にみられる価値、剰余価値論を通してみることができる。市民社会において、価格は利潤、賃銀、地代の所得として三っの階級に分化し、そこに不平等な分配にもとずく貧富の差をスミスは認めているのであるが、しかし、結局それも「社会のすみずみにまでゆきわたる全般的な富裕」によって解決せられるものとして考えられている。この間の矛盾は、スミスの価値規定と剰余労働の源泉をなす考え、つまり投下労働と支配労働、価格構成論と価格分解論という二重規定を検討することによって明らかにされるが、また資本主義的生産方法の条件となる「資本の蓄積、用途」を論ずる第2編においても、

すなわち生産的労働の二重規定をめぐって、スミスの剰余価値が、どのように把握されているかを考察する場合においてもスミスの階級概念が、いかに混同されたままつかまれているかが、理解されるのである。ここで知られることは、「経済人」そのものが一括して把握されてはいるものの、内容においてそれは明らかに階級的に分化しているにもかかわらず、そこにみられる階級上の矛盾、すなわち貧富の差は、生産力増大の結果である富裕が解決するものとせられていたということなのである。つまり、このことが結果的にもたらす結論は、スミスが「上層階級」に対する「中等ならびに下層階級」を対比させながら、スミスの規定する「経済人」の論理に従う「市民社会」においては、階級的な対立はあっても、それ自体結果的にこの社会においては解消されるということであった。そして、いいかえるならスミスの現実の社会に対する自然法的分析把握と理神論的世界観は、市民社会に現実に存在する貧富の差が、如何に本質的な問題に起因し、それが支配的、被支配的関係をつくりだしていくかという歴史的現実が存在するにもかかわらず、それを明らかにすることができなかったということなのである。かれの方法論の立論の基礎となった「経済人」は、スミス自ら、「経済人」を「上層階級」に対する階級的経済人として把握しながら、新しい「市民社会」においては「経済人」として抽象化された存在として把握されているのである。こうして成立したスミスの形而上学は、一体どのような限界をもち、あやまりを含むものであるのかは、この点を追求することによって、当然明らかにされてくるはずである。すなわち、かれの方法論において抽象化され、等質化された「経済人」は、それが階級的に、本来この社会において対立すべき要素をもつものであること、そして、その対立と矛盾が顕在化することによって必然的にかれの理神論的世界観は、くずれさるということなのである。そしてスミスに、それを予見せしめえなかったものが価値論上の誤謬であり、従って剰余価値論の欠如であった。私は、つぎにこうした観点にたって、スミスの限界を明らかにしていくことにしょう。

第2節　「経済人」とスミスの階級把握

〔1〕スミスが、かれの思想体系を通して、いかに一貫した思想内容をもち、それがいかなる方法論的解明をうけたかは、ここでの重要な前提をなしている[①]。すなわち、結果的にスミス体系を規定ずけると考えられる経済思想において、階級的経済人は、利己的本能に基いて営利活動に従事し、その成果は、「見えざる手」の導きにより、思い設けぬ社会的利益をもたらすというものであった。かれ、スミスにおいては、これによって理解されるように個人と社会とはまったく切りはなしえぬ有機的関係をもつものであるが、この場合歴史を、社会を説明し、人間社会のすべての基礎をなすものは、「作用原因[②]」としての個人であった。そして、この結果としての関連をなすものが「目的原因[③]」としての社会であったのである。これがスミスをして、重商主義を批判せしめた論理であるし、理神論的自然法的に把握された結果であるスミスの思想・方法論なのである。以上の如き観点に立って、スミスの『国富論』をみるなら、それ

がいかなる意図をもつものであり、その理論がいかなる内容をもつものであるかが理解されるはずである。

スミス「国富論」第1編において、「経済人」は、物を他と取引し、交換し、交易する傾向を有しており、商品生産はその経済人を基礎にして分業のあるところに成立するものと説明されている。この分業は労働の生産力を改善する基本的原因であり、スミスによれば、分業は次のような状態をもたらす。すなわち、「よく支配の行届いた社会においては、その人民の最下級に至るまで一般的に富裕であるが、これは分業の結果として各種の技術による生産が大いに増加するために他ならない。……彼（職工）は、それ等の人々にその必要とするものを充分に供給し、それ等の人々は彼の必要とするものを充分に彼に供給する。かくして一般的豊富が社会の諸階級全般を通じて行き亙るのである」[④]と。スミスは、商業社会を自然的な社会と考えており、そこでは人間は、分業的協業に基いて生産力を増大し、社会的富裕をもたらす。「国富論」第1編の最初の3章は、スミスの分業論に当り、「分業について」、「分業を発生させる原理」、「分業は市場の範囲によって制限されること」等がのべられている。分業が行われるところに成立する商業社会は、「各人は、交換することによって生活する。すなわち、ある程度商人となり、かくて社会それ自身は、いわゆる商業社会となるのである」とスミスがのべているように、「交換の法則」をこの社会での支配的原則とするものであり、この意味において第4章は、貨幣についてのべられている。つまり、「貨幣はすべての文明国において商業の一般的用具[⑤]」であり、「この媒介によってあらゆる種類の財貨は売買され、また相互に交換される」[⑥]ものであったのである。そして、スミスは、この交換を前提することによってここにスミスのいわゆる価値、剰余価値論が登場するに至る。第5章「商品の真実価格と名目価格とについて、すなわち、その労働価値とその貨幣価格とについて」、第6章「商品の価格の構成部分について」、第7章「商品の自然価格および市場価格について」がそれに当る。

ます、スミスの価値論は、商品の交換価値が何によって決定されるかという問題の提起にはじまる。第4章の終りで第5章の研究課題を、「種々の財貨を貨幣または他の財貨と交換するに当って、人々が自然に遵守するところの法則はいかなるものであるか、私は進んでこれを研究しょうと思う。これ等の法則は財貨の相対的価値または交換価値と呼ばれるものを決定する。」[⑦]とのべ、続いて「諸商品の交換価格を規定するところの原則を究明する」ための「三箇の問題を提示する。それは第1に、この交換価値の真の尺度は何か、第2に、真の価格を形成または構成している諸部分は何であるか、第3に、何故に市場価格は時々自然価格とはなれるか、という問題であるが、私は以下において、第1についてスミスの価値論をみ、第2で剰余価値の源泉がどのようにとらえられ、そこで階級は、どう現われるかをみることにする。

〔2〕(1)およそ人が富裕であるか貧乏であるかは、彼等が生活の必需品・便益品および娯楽品を享受しうる程度に応ずるものである。しかしながら、一度分業が行われるようになると、彼自身の労働が彼に供給するところは、これらの品物のきわめて小部分にすぎなくなる。

彼はその大部分をば他人の労働から獲なければならない。それで、彼は、彼の支配しうる労働の量、あるいは、彼が買うことのできる労働の量によって、あるいは富み、あるいは貧しからざるをえないのである。したがって、ある商品の価値は、それを所有するが、しかしそれを自ら使用し、または消費しょうとは思わず、それを以て他の商品が彼をして購買せしめるところの労働の量に等しい。それ故に、労働はあらゆる商品の交換価値の真実の尺度である。[8]

(2)すべての物の真実価格、すなわちすべての物がそれを獲んとする人をして真実に支払わしめるところのものは、それを得るための労役と苦心である。すべてのものは、それを獲てそれを売却し、またはそれを他の物と交換せんと欲する人にとって、真実にどれだけの価値があるかといえば、それは、それによって自らまぬがれることができる労役と苦心であり、またそれが課することができる労役と苦心である。貨幣または貨幣を以て物を買うとき、それは労働によって買うのであって、それはあたかも我々が物を獲得するのは自己の肉体の労役によるのと同じことである。右の貨幣または右の貨物は、実に我々にこの労役をまぬがれさせてくれる。それには一定量の労働の価値がふくまれているので、我々は、このとき同量の価値をふくむと考えられる物と交換するのである。かくして労働は、最初の価格であった。あらゆる物に対して払われるところの本源的購買貨幣であった。世界におけるあらゆる富がはじめて買われたのは、金または銀によってではなくて、労働によってであった。それ故、この富を所有し、それを新しい生産物を交換しょうとする人々にとって、この価値は、それが彼をして購買し、または支配しえせしめるところの労働の量に正確に等しいのである。[9]

「ホッブス氏のいうが如く、富は力である。……その（富＝財産）所有が即時に、直接に彼にもたらすものは購買力である。すべての労働に対するある程度の支配である。更にいいかえれば、その時その市場にあるすべての労働の生産物に対するある程度の支配である。彼の財産は、この大きさに、言葉をかえていえば、他人の労働の量に、更に、それと同じことではあるが、それを以て彼が購い得、または支配し得るところの他人の生産物の量に正確に比例して、あるいは大であり、あるいは小である。あらゆる物の交換価値は、つねにそれがその所有者にもたらすところのこの力の大きさに正確に比例するものである。」[10]

以上にみられるスミスの引用は、スミスの価値論を語る上に、もっとも基本的な部分ということができる。ここでまず知られることは、スミスが「商品の交換の真実の尺度」を「労働」に求めているということである。

しかし、ここで注意を要することは、最後の引用にある如く、スミスが富の観点から、「他人の労働の量」と「それを以て彼が購い得、または支配し得るところの他人の生産物の量」とを同一なものとして理解している点である。すなわち、スミスは、「労働」と「労働の生産物」、つまり「生きた労働」と「対象化された労働」とを混同していたのである。これについて、マルクスは「ここでは、重点がおかれているのは、分業および交換価値と共にもたらされたる私の労働と他人の労働との、換言すれば、社会的労働との対置であって（私の労働、また

は私の商品に包含されている労働が、すでに社会的に決定されているということ、そしてその性質が本質的に変化したということは、アダムに見おとされている）、決して対象化された労働と生ける労働との間の区別ではなく、また、その交換の特殊な法則でもない。実際において、アダム・スミスは、ここで商品の価値がその中に包含されたる労働時間によって決定され、かつ商品所有者の富は、かれが処理しうる社会的の労働の量に存する、ということをいっているにすぎない」[11]とのべている。

また、スミスは「価値」と「交換価値」を区別せず、混同したままであった。スミスは「交換価値の真実の尺度」を求めたわけであるが、本来、交換価値そのものは、価値の現象形態なのであるから、まずスミスによって価値そのものが、価値の現象形態なのであるから、まずスミスによって価値そのものが、すなわち価値の内在的尺度が見究められねばならなかったのである。しかしながら、スミスはこの点については、私労働について、すぐ上記のマルクスの引用にみられるように、スミスは主観的な「労役と苦心」という一定量の労働として把握し、一般的社会的労働としては把握していなかった。その上、この労働の生産物と混同され、同一視されていたのである。また、価値の外在的尺度は、価値の内在的尺度の現象形態であるが、スミスにあっては「商品の価値の大きさが実際にはその生産に必要な労働時間によってはかられないで、他商品の（結局は貨幣商品たる金銀の）分量ではかられる」[12]ものとされており、商品は平明な触知しうべき事物であるが労働は一種の抽象概念であって、商品の方がわかり易いので、商品が価値の外在的尺度とされたのである。

このことが示すものは、「スミスは、商品の価値と交換価値との間の内的関連の把握に、従ってまた貨幣の必然性の把握に、完全に失敗したのであるが、この価値と価値形態との関連の無理解、従って両者の混同は、それと相関連する不変の価値尺度の探求の妄想および価値の対象的性質の看過、従ってまた、対象化された労働と生きた労働との混同、および価値形成労働としての労働の同質性の個人的・主観的根拠ずけの誤謬と相俟って、後に俗流経済学の一派によって継承され発展された決定的な謬説に導くこととなった労働の価値による価値決定の主張」[13]の原因がそこにあるということである。すなわち、「労働自身に対して、従って、その尺度たる労働時間に対して妥当することが、すなわち商品の価値は労働の価値がどのように変動しょうとも、商品の中に実現されている労働時間に比例するということが、ここではこの変動する労働の価値そのものに対して主張されている」[14]というマルクスの批判が、これに答えるものである。

〔3〕　私は、第2項において、スミスの価値論における矛盾、混乱がいかなるものであるかをみてきたが、ここではスミスの価値論を通して、剰余価値の源泉がどのような形で現われているか、そして、そこには価値論上の誤謬がどんな矛盾として示されているかを考察したい。

さて、スミスの価値論の誤りは、マルクスの指摘にみられるように、商品の価値を労働の価

値によって決定せんとするところにあった。このスミスの考えには、明らかな「ある商品の生産に費やされた労働」と「その商品によって支配されうる労働」との混同、すなわち同一視があった。すなわち、ここでは商品の価値が、その生産に必要な労働時間によって決定されるということが充分に理解されていない。従って正しい価値の決定は行われえないのである。

また、スミスにおいては、労働力が把握されていない。従って剰余価値は、価値法則から展開されていない。労働力は商品として資本家に買われるが、それは商品であるから、価値と使用価値を持っている。労働力の価値は、その再生産に必要な労働時間、すなわち労働力の所有者を維持するための生活手段の生産に必要な労働時間によって規定される。そして労働力の使用価値は、労働する能力である。しかし、この労働は、商品生産に用いられた結果として新しい価値をつくりだすという使用価値を有しているものである。

私がいまここに二つあげたものは、それぞれスミスの価値論・剰余価値の源泉を把握する上に、もっとも基本的な問題である。この二つを前提にして、スミスの価値論がどう剰余価値の源泉を見出しているかを、次にみよう。スミスは、価値の大きさを決定するものとして、投下労働量と支配労働量なる二つをあげているが、それは単純な商品生産の関係においてのみ量的に等しいものであった。すなわちスミスによれば、「資本の蓄積と土地の私有とに先立つ初期未開の社会においては、種々の物品を得るために必要とされる労働量の間の割合は、それらの物品を相互に交換するための定規となり得る唯一の事情であったと思われる[15]」ものであって、その理由は「かくの如き事情の下においては、労働の全生産物は労働者に属する。そして、ある物品の獲得または生産に普通に要する労働の量は、通例その物品をもって購い、支配し、またはそれと交換せられる労働の量を律しうる唯一の事情である[16]」と説明されている。従って、ここでは、商品の価値は、その中に具体化されている労働時間によって決定されるものであることが知られる。スミスはすぐ続いて、資本家的生産関係における価値規定についてのべている。「資本が一度特殊の人々の手に蓄積されるや否や、かれらのあるものは、その資本を用いて、勤勉なる人々に原料と生活資料とを供給して仕事をなさしめ、かれらの製作物の売却によりて、または、その人々の労働が原料の価値に添加するものによって、利潤をえようとするのは自然であろう。そうして完成したる製造品を、貨幣、労働、または他の財貨と交換する場合には、この冒険にあえて資本を投ずるこの事業の企業家にもその利潤として、原料の価格及び職工の賃銀を支払うに足るもの以上に、何物かが与えられなければならない。それ故に、この職工達が原料に添加するところの価値は、この場合には二つの部分に分解する。すなわち、一部分はかれらの賃銀を支払う、そして他の部分は、雇主が前貸ししたところの原料と労賃との全資本に対する利潤を支払う。[17]」そしてこの結果、「労働者は雇主と生産物を分割する。労働のみが価値を規定することはできない。[18]」という。要するにスミスは、資本の蓄積と同時に、労働はかれの労働の所産の全部をもはや取得しなくなるということ、従ってまた、「生産に必要な労働の量」と「支配しうる労働の量」とがもはや一致しなくなり、――こういうことから

資本が蓄積された以後においては、商品の生産に必要な労働量の割合は、もはやそれらの商品を相互に交換するための定規とはなりえなくなると結論するのである。[19] つまり、ここでスミスは、私が第3項のはじめにおいてのべた商品の価値の決定についての誤りを犯しているのである。だが同時に、スミスにとっての問題は、労働力が充分に把握されていなかったことである。スミスはこれをとらえていないために、資本家的社会に特有な資本と労働との交換を理解し得ず、価値法則から一貫した剰余価値の把握に至らなかった。しかし、事実上スミスは剰余価値を把握していた。すなわち労働者によって投下された労働が、資本家のためにつくりだした価値は、上記引用のあるように賃銀と利潤の二つの部分に分解されるのであり、このことは労働力が対象化された商品価値と労働力の価値との不等価を示している。

この剰余の労働は、地代についてもいいうる。「ある国の土地がすべて私有財産となるや否や、地主もまたすべての他の人々と同じく、かれらがかって蒔かなかった場所で収獲することを好み、その自然的な生産物に対してすら、地代を要求する。……彼（労働者）は今やこれを採取するための許可に対して代償を払わねばならない。そして彼の労働が採取し、あるいは生産した物の一部分を地主に提供せねばならない。この部分、もしくは、同じことであるが、この部分の価格は土地の地代を構成する。」[20]

スミスはこのように、「剰余価値を、すなわち剰余労働を、換言すれば遂行された労働および商品に実現された労働の支払われた労働を超ゆる、すなわち、その等価を労働賃銀で受け取る労働を超ゆる労働を、一般的範疇として理解」[21]しているといえよう。

ともあれ、以上の点について、スミスが単純な商品生産から資本家的生産において、投下された労働量に基いた価値規定を貫き、不等量な労働の交換を、労働力の価値によって把握したならば、剰余労働は価値法則展開の結果としてとらえることができたはずである。しかし、スミスは投下労働量と支配労働量の二つを持って、価値規定を行おうとした。従って資本家的生産関係の中では、その二つが一致しない故に、投下労働量は放棄せられ、労働の価値を不変の価値尺度として誤認して、商品価値の決定が行なわれた。当然、そのために商品に含まれた投下された労働量と、労働の価値、すなわち支配しうる労働の量は一致するはずはないのである。単純な商品生産段階で労働の報酬として考えられた自然的賃銀は、資本家的生産関係では労働生産物の一部としての資本家的賃銀を所得するのであるが、ここで労働の価値は不変なる尺度をもち、生産力発展の結果変化するのは、労働の生産力の変化であるとせられたわけである。資本家によって買われる労働は、生きた労働であり、賃銀として与えられる労働に対する報酬でしかなかった。これが労働力の価値として把握されていれば……、このことはすでに何度もくり返しのべたことであるが、剰余労働は、労働の報酬と、それによって形成された商品の価値との差、正しくは労働力の価値と、それが対象化された商品の価値との間にある不等量の労働の交換によって生ずるものであり、これによって知られるようにスミスは、さまざまな誤りは犯したのであるが、しかし事実の上で、剰余労働そのものを把握していたという事実そ

のものは明らかであったのである。

〔4〕 いま私は、スミスの価値論、そして剰余価値論について考察を行ってきた。そして資本家的生産関係の中においては、労働の生産物は、賃銀の他に、利潤、地代として分割されることをみてきた。すなわち、利潤、地代は、労働者の剰余労働の結果もたらされるものであった。第6章「商品の価格の構成部分について」と題された中で、第3項において詳述したように、商品の価値は、労働者が原料につけ加えた価値からの二つの分割部分を含めて生産されたものであって、労働生産物の全価値は、賃銀、利潤、地代という三つの構成部分に分解されるとスミスによって考えられていた。しかしながら、スミスは、資本家的生産関係における商品の交換は、価値法則によって行われると主張しなかったのであって、この欠陥によって、スミスの価値は三つの部分によって構成せられるものと考えられるに至った。従って、商品交換はいわゆる自然価格に基いた法則によって行われると解されたのである。こうしたスミスをみると私達は、スミスがいかにあるがままに当時のイギリスの社会を観察し、そこからあるべき自然的秩序としての二つのもの——価値法則と自然価格の法則とを経験的に引出していたかを理解することができる。[22] 第1項のおわりで、私はスミスの考えに基いて三つの問題を提示し、ここでの課題が、価値、剰余価値論を通して、スミスの階級がどうとらえられているかを明らかにするにあるとのべたが、それはスミスにとって価値が分解されるものであるにせよ、あるいは構成されるものであるにせよ、価値が賃銀、利潤、地代の三つのものをもつことをみたことで明らかであろう。このことは、第一編第8章以下を考察することでさらに明らかにすることができるが、ここでは、そこに扱われている問題について、第7章の終りでスミスののべていることを引用するにとどめておこう。「自然価格そのものは、その構成部分たる賃銀、利潤および地代の各々の自然率が変動するに応じて変動する。各社会において、この率はその社会の事情、すなわちその貧富、その進歩、停滞または退歩の状に応じて変動する。以下の4章において、私はできるだけ充分に且つ明らかに、これらの変動のさまざまの原因を説明することにつとめるであろう。」[23]

ここでの賃銀・利潤・地代は、労働者・資本家・地主によって、それぞれ所得として受け取られるものであり、自然価格が三つの要素をもって成立しているということは、スミスによってとらえられた社会が、それら三つの階級よりなることを意味している。そしてスミスはこれらの三階級を社会における基本的なものとしてとらえ、これらの諸階級はそれぞれ「土地」「労働」「ストック」の所有者、商人として、相互に相対するものだと考えていた。[24] この限りにおいてスミスは、労働者を商品所有者＝経済人として資本家・地主と等質的なものとしてとらえていた。しかしながら、それはスミスにおいても、事実上等質でないことはみととめられていたことである。すでに何度もふれるように、価値法則に立って正しいものではなかったにせよ、スミスは剰余労働についてのべているのである。[25] そして、それが当然のことながら社会に不平等・不公平をもたらしているのである。[26] しかし、この搾取によってもたらされる不平等

も、スミスにおいては、結局、分業による生産力の増大、不生産的労働に対する生産的労働の増大、ストックの蓄積によって「財産の不平等にもかかわらず、富裕は社会の最下層の人口にまでゆきわたる[27]」として解決せられてしまうのである。[28]また、スミスは「かれの仕度を以て富者の非常な豪奢に比ぶれば、ひどく簡易に見えるに違いない。けれども、勤勉にして倹約なる百姓一人の仕度は、一万の裸の野蕃人に対して生殺与奪の絶対権を有するアフリカの王様のそれに優ること万万である。その差に比ぶれば、ヨーロッパの王様の仕度の農民のそれに対する優越のごときおそらくはいうに足らない[29]」といっているが、これは未開社会を文明社会と比較し、文明社会が相対的に富裕であることを示し、不平等も、相対的にみれば富裕であるとしてスミスはかたずけているわけである。

この様に、スミスのとらえた諸階級は、富裕の観点からとらえられ、そのために不平等という意識は、それをもたらした剰余労働なる概念とともに、表面的なものにとどまるのであるが、社会全体の利益とそれら三つの階級について、スミスはいかにみていたであろうか。これは、第一編第11章の「本章の結論」において考察されている。すなわち、社会の進歩そのものが利益である階級は、労働者階級[30]ならびに地主階級[31]であって、資本家階級[32]はそれに反するといわれる。なぜ、資本家階級は、社会全体の利益に反するか、それについては、スミスが第四編をのべるについて、その重商主義批判の中でのべていることであるが、それは、資本家階級が「ある特定部門の商業または製造業にたずさわっている商人[33]」として、独占的な商人、製造業者であるからである。従って、もしそううでなく、資本家階級の利益が「自然にあるべきなず」の利潤であるならば、それは他の二階級と共に社会全体の利益に合致するもののであるはずである。ミスにとって、独占的商人、製造業者は富の増大を阻害するものであった。このことは、スミスをして重商主義批判をなさしめる大きな要因となっているのである。

すなわち、ここで結論されることは、以上のような労働者階級・資本家階級（独占的でない）、地主階級にもとずいて構成されている社会が、スミスの求めている資本主義社会――自然的社会であるということである。そして、このような意味でのべられた諸階級が「経済人」として一括した概念であらわされているのであって、この「経済人」こそ、第1項でのべた新しい社会層をなしているのである。これら三つの階級をもつ「経済人」の活動は、従って社会的富裕をもたらし、またそれ故に「徳への途」へ通じるのである。

しかしながら、私たちは、つぎのことをここで忘れてはならない。それは剰余労働が、価値法則の展開された結果でなく、不完全なものであるとしても、事実的にとらえられており、正しい理解が眼前におかれていたにもかかわらず、社会的富裕の観点から「経済人」として三つの階級が等質的に把握されているということである。いいかえるなら明らかに「資本家階級・地主階級」と「労働階級」の間には、剰余労働――不等価の労働の交換という不平等が存在し、等質的に把握されるべきではないはずのものが、スミス自身の価値論の欠陥によって、理論的に明らかにされないまま、市民社会の将来を予見することを不可能にしてしまったという

ことである。ここにみられるスミスの誤謬は、スミス価値論の欠陥が歴史的発展段階からの制約を受けたものとして解するならば、止むを得ぬものであったかも知れない。しかし、その誤謬は、理神論的・自然法的思想（それは経済理論としても深化された）にもとずいて、社会を方法論的に説明しょうとしたスミスにとっては、当然の帰結でもあったのであるが、同時にここにスミス経済学のもっとも基本的な限界を、そしてスミスの世界観、その方法論上の限界をみることができるといえるのである。

註 ① 東海学園女子短期大学「紀要」第2号拙稿

②③ Adam Smith, The Theory of Moral Sentiments (The Works of Adam Smith, vol. I) PP.147～148、「道徳情操論」下巻 米林富男訳 PP.181～182

④ 「国富論」大内兵衛訳、1分冊、34～35頁

⑤⑥ 同、64頁

⑦ 同、64頁

⑧ 同、67頁

⑨ 同、67～68頁

⑩ 同、68～69頁

⑪ マルクス、剰余価値学説史、改造社版、向坂逸郎訳、第1巻、147～148頁

⑫ 久留間鮫造、経済学史、93頁⑬同、94～95頁

⑭ マルクス、剰余価値学説史、邦訳全集、8巻、160頁

⑮ 「国富論」1分冊、100頁⑯同、101頁

⑰ 同、101～102頁

⑱ 同、103頁

⑲ 久留間、108頁

⑳ 「国富論」1分冊、104頁

㉑ 剰余価値学説史、第1巻、156頁

㉒ 遊部久蔵、古典経済学の成立、159頁

㉓ 「国富論」1分冊、128頁

㉔ スミスは、ただしこれらを必ずしも厳密な意味で把握していたわけではない。この事情については内田義彦、経済学の生誕、206～210頁参照

㉕ 「国富論」1分冊、第8章132～133頁

㉖ 水田洋訳、国富論草稿、世界古典文庫版、46～52頁

㉗ 「国富論」1分冊、156頁

㉘ こうした考えが、第1章でのべたスミスの上流社会に対する批判を生みだした理由である。かれらは不生産的階級であって、従って富裕の増大になんら寄与しない。

㉙ 「国富論」1分冊、37頁

㉚ 同、469～470頁

○ 同、468～469頁

㉜ 同、470～471頁

㉝ 同、471頁

参 考 文 献

1. アダム・スミス　国富論大内兵衛訳
2. 〃　国富論草稿その他　大道安次郎訳
3. 〃　道徳情操論　米村富男訳
4. カール・マルクス　資本論　長谷部文雄訳
5. 〃　剰余価値学説史　向坂逸郎訳
6. 高島善哉　原典「国富論」解説
7. 〃　アダム・スミスの市民体系
8. 高島善哉編　古典経済学の成立
9. 久留間鮫造　経済学史
10. 大河内一男　スミスとリスト
11. 内田義彦　経済学の生誕
12. 水田　洋　アダム・スミス研究入門
13. 田中吉六　スミスとマルクス
14. 藤塚知義　アダム・スミス革命